

名詞化接尾辞「さ」について -韓国語との対照を中心に-

李 琴 嬉

キーワード：形容詞、接尾辞、名詞化、基本的意味、派生的意味

要 旨

本論文は「形容詞+さ」を対象とし、形容詞の意味と派生名詞との関係について、韓国語の名詞化接尾辞「(으)ㄴ(um)」「이(i)」「기(ki)」と比較対照しながら考察した。その結果、①「さ」は形容詞の有する意味の一部しか引き継がない場合が多いこと、②「さ」はほとんど全ての形容詞に付いて抽象名詞を作るのに対し、韓国語の場合は動詞・形容詞に付き具体名詞・抽象名詞を作る点に違いがあること、が分かった。

0. はじめに

語は、大きく単純語と合成語に分けられ、合成語をさらに細分すると複合語（語基+語基）と派生語（語基+接辞）に分けられる。接辞は語基の上に付くものを接頭辞、語基の下に付くものを接尾辞と呼ぶ。

本論文では、接尾辞の中で、形容詞・形容動詞の語基に接続して、名詞に変える機能を持っている名詞化接尾辞「さ」を取り上げ、「さ」の意味・機能を考察する。また、韓国語において、生産性の高い名詞化接尾辞「(으)ㄴ(um)」「이(i)」「기(ki)」⁽¹⁾を取り上げ、両者の対照を通して両国語の名詞化接尾辞の特性を明らかにする。

1. 従来の研究

「さ」の従来の研究としては、清水（1978）、相原（1984）、遠藤（1985）、森田（1989）、影山（1993）、西尾（1995）らの研究をあげられる。

いままでの研究は「さ」は形容詞・形容動詞に接続して名詞に変える働きをし、語基の形容詞が表す状態・程度をそのまま名詞化して抽象名詞を作る機能を持つと述べられてきた。ところが、実際、辞書⁽²⁾に載っている派生語の意味には語基（形容詞）が持っている意味の一部しか書かれていない。実例から見られる派生語の意味も語基の意味より範囲がせまく用いられている。つまり、名詞化されて使われる際には意味の範囲が狭まる。この点に重点をおきながら形容詞・形容動詞の分析を行う。

本論文では、便宜上、形容詞を6分類し⁽³⁾、分析の際、意味の判定の根拠は、西尾（1972）

(4) に従って論を進めていきたい。

2. 「さ」の接続と機能

「さ」はほとんど全ての形容詞・形容動詞に接続して抽象名詞を派生する。また、単純形容詞（「青い」）だけではなく、複合形容詞（「青白い」）にも接続する。そして、統語論的には「語」レベルだけでなく「句」レベルにも「さ」が付いて「句接辞」⁽⁵⁾にも用いられている。

語種としては、和語（「青さ」）、漢語（「雄弁さ」）、外来語（「クリーンさ」）に接続しているように幅広い分布が見られる。

「さ」の語基になりうる品詞としては、一番例が多く見られるのが形容詞・形容動詞（「甘さ」「静かさ」）で、名詞（「盲目さ」）への接続も多くの例が見られる。そして、副詞（「しみじみさ」）、動詞連用形+助動詞（「耐えがたさ」）、形容詞+接尾辞（「安っぽさ」）、名詞+接尾辞（「男らしさ」）などにも少なくない例が見られる。

「さ」の機能として、森田（1989）では、「多くの形容詞・形容動詞の語幹に付いて、状態的なものを程度概念の名詞に変える働きを持つ」と述べている。また、西尾（1995）では、「さ」は「抽象名詞の範囲に止まっていて、具体名詞を作らない」と「さ」が表す意味の特性を述べている。

3. 「さ」の意味用法と機能分析

形容詞は大きく、客観性形容詞と主観性形容詞⁽⁶⁾に分けられるが、分析の便宜のため、形容詞を色彩を表す形容詞、味覚を表す形容詞、感覚を表す形容詞、感情を表す形容詞、ものの感覚や質を表す形容詞、ものの形や量を表す形容詞に6分類して分析を行う。

3.1 色彩を表す形容詞

- (1) 加藤は幾日かぶりに見るような気持ちで青空を仰いだ。神戸で見る、どこかに水蒸気の存在を感じずるような青さではなく、コバルトブリューのインクをぶらまいたような青さであった。(弧 (上))
- (2) 照り輝くような濃い赤さの紅葉で、都のそれとは、さすがにちがひ、冷たい山里の露が染めあげた美しさは珍しかった。(新源 (上))
- (3) 降りそそぐ日光と煌き反射する雪の白さとの中で、私の心を引き裂いていた。(草)
- (4) ジャンパー姿の白人の中年男。ジーンズをはいた白人の若者。見事なほどの黒さの年老いた黒人(一瞬 (上))

(表1)

語基の意味 (形容詞)	派生語の辞書的な意味	実例から見られる派生語の意味
「青い」 ①本来は黒と白との中間の広い色で、おもに青、緑、藍をさす。青の色をしている。青の色である。 ②顔色が青ざめている。血の気がない。 ③(未熟な果実などは青色をしているところから) 人格、機能、学問などが未熟である。また、遊芸の道でやぼである。	「青さ」 青いこと。また、その度合い。	「青さ」 ① 青の色である。

上の(1)～(4)の用例で見られるように、「青い」の語基は多義(表1を参照)の意味を持っているが派生語の意味は色そのもの(①)を表す基本的な意味しか用いられない。つまり、本来語基の持っている意味が名詞化された場合、意味の範囲が狭まっている。「青さ」以外にも「赤さ」「白さ」「黒さ」などからも色そのものを表す基本的な意味として現れている。しかし、辞書では、「形容詞+こと」のように記述されていて、「色そのもの」を表しているのか、派生的な意味まで含まれているのか非常に曖昧である。

色彩を表す形容詞には「さ」が付いて派生語で表した場合、「青さを見る」「白さが目にしみる」「青さがしみこむ」「青さを見つめる」「白さが見える」のような表現がよく見られる。これは、「色」というものは人の感覚器官の目を通して行われるので、述語としては視覚作用の表現がよく来るからである。

3.2 味覚を表す形容詞

- (5) 甘さもすっぱさも、とにかく味が濃い(天声人語)
- (5') 夏枝の言葉づかいや態度にはやさしさや甘さがあった。(氷点(上))
- (6) タマネギの甘さとみそのからさ、(朝日)
- (6') 審判の判定の辛さに堪り兼ねて監督に抗議した。(作例)
- (7) そのコーヒーの苦さは亜由美の気持ちの苦さにそっくりだった。(恋歌)
- (7') そのコーヒーの苦さは亜由美の気持ちの苦さにそっくりだった。(恋歌)
- (8) 早めにもぎすぎた柿の渋さに驚いた。(作例)
- (8') 血の重さ、とでも言おうか、生命の渋さ、とでも言おうか、(人間)

(表2)

語基の意味 (形容詞)	派生語の辞書的な意味	実例から見られる派生語の意味
<p>「甘い」</p> <p>一 味覚に関していう。</p> <p>① 砂糖や蜜などの糖分の味がする。② 塩気が悪い。辛くない。</p> <p>二 心理的に砂糖や蜜の味のように感じられるさま。</p> <p>① (ことばに関して) 人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。② 愛情がこまやかである。男女の間の愛情についていうことが多い。③ (音楽や香りやその他のいろいろの物事について) うつとりと快い。</p> <p>三 心理的に塩気のきいていないような感じということから、きびしさ、鋭さ、強さなどに乏しいさま。① なまぬるい。手ぬるい。また、愛情におぼれて厳格でない。② しっかりしていない。きっちりしていない。しまりがない。③ 切れ味が悪い。④ 物価、株価がやや低い。また、低く成り気味である。⑤ 芝居などで、興行物の不入りなのという。</p>	<p>「甘さ」</p> <p>甘いこと。また、甘い度合い。</p>	<p>「甘さ」</p> <p>一の① 砂糖や蜜などの糖分の味がする。</p> <p>二の① (ことばに関して) 人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。</p>

上記の(5)～(8)の用例は味覚を表す形容詞に「さ」が付いて派生語を形成しているが、色彩形容詞とは違って基本的な意味と派生的な意味の両方表している。

(5)～(8)の例は人が「舌」という感覚器官を通して感じられる、「味そのもの」の基本的な意味を表しているのに対して、(5')～(8')の用例は人の内面を表す「性格」「人柄」「心理的状态」などのように、派生的な意味として現れている。

辞書に載っている派生語の意味では「形容詞+こと」のように、味そのものを表すのか、実際から見られるようなもっと広い範囲を表しているのか曖昧である。

味覚形容詞の基本的・派生的な意味の主体は人間であることには変わりはないが、色彩形容詞と違って表す意味の範囲が広い。

3.3 感覚を表す形容詞

(9) 言うまでのなく、そういう肉体的な痛さよりも、(さぶ)

(9') 津田はすこし痛かった。けれどもそれは彼の胸に来る痛さで、(明暗 (上))

(表 3)

語基の意味 (形容詞)	派生語の辞書的意味	実例から見られる派生語の意味
<p>「痛い」</p> <p>① 程度のはなはだしいさま。激しいこと。ひどいこと。②世話のやける相手を見下げあざける感情を表わす。ひどいこと。やっかいなこと。③肉体的または精神的に苦痛なさま。いたいこと。</p>	<p>「痛さ」</p> <p>痛い感じ。またその度合い。</p>	<p>「痛さ」</p> <p>①程度のはなはだしいさま。激しいこと。ひどいこと。②世話のやける相手を見下げあざける感情を表わす。ひどいこと。やっかいなこと。③肉体的または精神的に苦痛なさま。いたいこと。</p>

上記の用例 (9) では人が直接的に感じる「肉体的な痛さ」で基本的な意味、(9') では「精神的な痛さ」で派生的な意味を表している。感覚形容詞は感情形容詞と共に、「さ」派生語が多く見られる。

3.4 感情を表す形容詞

(10) この話をしながらも私は悲しさがこみ上げてきて、つい泣き出してしまった。(今)

(10') 休んでみいいのに休まないのは、勤め人の悲しさである。(弧 (上))

(表 4)

語基の意味 (形容詞)	派生語の辞書的な意味	実例から見られる派生語の意味
<p>「悲しい」</p> <p>感情が痛切にせまってはげしく心がゆさぶられるさまを広く表現する。悲哀に愛憐にもいう。</p> <p>① 死、別離など、人の願いにそむくような事態に直面して心が強くいたむ。なげかわしい。いたましい。② (愛) 男女、親子などの間での切ない愛情を表わす。身にしみてい</p>	<p>「悲しさ」</p> <p>①悲しいこと。またその度合い。②可愛いこと、いとしいこと、大切に惜しまれること。またその度合い。③貧しいこと。またその度合い。④努力してもどうにもならない、本質的なことによる限界を感じる悲しみ。</p>	<p>「悲しさ」</p> <p>死、別離など、人の願いにそむくような事態に直面して心が強くいたむ。なげかわしい。いたましい。⑤他から受けた仕打ちがひどく心にこたえるさま。残念だ。くやしい。しゃくだ。</p>

<p>とおしい。かわいくてたまらない。いとしい。③関心や興味を深くそそられて、興味を催す。心にしみておもしろいと感じる。しみじみと心を打たれる。④みごとだ。あっぱれだ。⑤他から受けた仕打ちがひどく心にこたえるさま。残念だ。くやしい。しゃくだ。⑥貧苦が身にこたえるさま。貧しくてつらい。</p>		
--	--	--

上記(10)(10')の用例も感覚形容詞と同じく、基本的な意味・派生的な意味両方を現れている。(表4)からも分かるように感情形容詞は他の形容詞と違って、派生語の意味が語基の本来持っている意味とほぼ同じぐらいの範囲で用いられている。

3.5 物の感覚・質を表す形容詞

(11) もうほとんど見分けられない暗さになりだしていた。(風)

(11') この少年にはまったく暗さがなく、少年院のなかでの生活を(冬)

(12) 目が見えなくとも、明るさはわかるのよ。(弧(上))

(12') 放送当日、画面は大家族の明るさを瞬く間に画面に映し流し、予定通りの短さで終了した。(朝日)

(表5)

語基の意味(形容詞)	派生語の辞書的な意味	実例から見られる意味
<p>「暗い」 ① 光が少なく、物がよく、または、まったく見えないさま。また、明るさがない。② 物事をよく理解し判断する知力がない。おろかである。③ 文化がまだ発達していない。④ 物事の事情をよく知らない。不案内である。⑤ 不足している。不十分である。⑥ 物事の筋が通らずあやしい。不正である。悪い。⑦ (目)が不自由である。目がよく見えない。⑧ 陰気である。不吉でいやな感じがする。</p>	<p>「暗さ」 暗いこと。またその度合い。</p>	<p>「暗さ」 ① 光が少なく、物がよく、または、まったく見えないさま。また、明るさがない。⑧ 陰気である。不吉でいやな感じがする。</p>

上記の (11) (12) の例は対義語を持つ形容詞である。用例からも分かるようにプラス評価 (7) をしている形容詞だけではなく、マイナス評価を持つ形容詞にも「さ」が付いて派生名詞をつくる。また、基本的な意味・派生的な意味両方を現れている。

(11) (12) の例では、「肉眼」で感じられる、基本的な意味、(11') (12') では、「肉眼」ではなく、「精神的な意味」の派生的な意味として現れている。

3.6 ものの形や量を表す形容詞

(13) 西瓜を細長くしたような形状で、やはり重さというほどの重さはなかった。(世(上))

(13') 人間不信の暗い重さが、彼の背にかかっていた。(弧(上))

(14) 女はメヌエットでも踊るように、ドレスの裾をつまんで私に向けた。それは軽さも柔らかさも、ぬめりのある感触も、まちがいなく上等のシルク・サテンだった。(鉄)

(14') 権威をもって行くべき道をこころえたような少年のあしどりの軽さは(焼跡)

(表6)

語基の意味 (形容詞)	派生語の辞書的な意味	実例から見られる派生語の意味
<p>「重い」</p> <p>①目方が多い。重量がある。 ②(病気など)物事の程度がはなはだしい。なみなみでない。容易でない。重大である。 ③身分が貴い。地位が高い。家柄がしっかりしている。家門に格式がある。④尊い。大切である。必要である。重要である。⑤態度や性質が落ち着いている。軽率でない。おもおもしろい。慎重な。⑥気持ちをはればれとしない。沈んでいる。浮き立たない。小さいである。⑦動き、働きが鈍い。動作がおっくうである。てきぱきしない。生彩がない。 ⑧相場が上がりそうで上がらない。⑨囲碁で右の手割り上の価値が大きくて捨てにくい。⑩将棋で駒の働きが重複している。⑪競馬で、競走馬の体重がその馬の理想体重より重いことをいう。</p>	<p>「重さ」</p> <p>① 重いこと。またその度合い。②物理学で、質量と区別し、物体にはたらく重力の大きさをいう。</p>	<p>「重さ」</p> <p>① 目方が多い。重量がある。 ⑥ 気持ちをはればれとしない。沈んでいる。浮き立たない。小さいである。</p>

上記の (13) (14) の用例は、肉眼で分かる尺度を表す基本的な意味、(13') (14') では

人の「精神的な面」の尺度の意味の派生的な意味を表している。辞書で表されている派生語の意味は「形容詞+こと」の意味だけではなく、他の意味にもおよんでいて（表6の「重さ」「派生語の辞書的な意味」②参照）。実例からも派生的な意味より、基本的な意味が圧倒的に多く見られる。それは、客観的な形容詞の特徴の一つと思われる。

4. 「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」の意味と機能

「さ」に当たる韓国語の名詞化接尾辞には「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」があげられるが、「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」は「さ」と違って、動詞・形容詞に付いて具体名詞、抽象名詞を作る。先行研究としては、任(1972)、蔡(1979)、HA(1987、1996)、宋(1993)、金(1994)、金(1996)らの研究があげられる。「さ」は形容詞・形容動詞、名詞、副詞、動詞連用形+助動詞などの語基に付くものに対して、「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」は動詞・形容詞の語基に付いて、派生名詞を作る。語基になる品詞によって意味も違ってくる。「さ」は抽象名詞しか作れないのに対して、「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」は語基が動詞の場合は抽象名詞と具体名詞を作り、形容詞の場合は「さ」と同様の抽象名詞しか作らない。

なお、本論文では語基が形容詞の場合だけを対象にして行う。また、「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」が「さ」とどんな類似点と相違点があるかを見てみたい。

「さ」はほとんど全ての形容詞に付くものに対し、「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」は形容詞の種類によって、接続が限られている。例えば、感情を表す形容詞には、「(음)ㅁ(um)」が生産的に接続しているし⁽⁸⁾、客観性形容詞の中、尺度を表す形容詞⁽⁹⁾には、「이(i)」か「기(ki)」しか接続しない。また、客観性形容詞のなかでも対義語を持つ形容詞の場合、「さ」は積極的な意味・消極的な意味を表す形容詞両方とも付くものに対し、「이(i)」「기(ki)」は消極的な意味を表す形容詞には付かない⁽¹⁰⁾。

「さ」は感覚形容詞（色彩⁽¹¹⁾、味覚、聴覚、嗅覚、触覚を表す形容詞を含む）にも接続するのに対し、「(음)ㅁ(um)」は少数の触覚を表す形容詞を除いての感覚形容詞には接続しない⁽¹²⁾。

上述した点を（表7）、（表8）、（表9）でまとめると次のようである。

（表7）

接続語基	日本語の接尾辞「さ」	韓国語の接尾辞「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」
動詞	/	가르침(教え)、놀이(遊び)、달리기(走り)
形容詞（形容動詞を含む）	青さ、甘さ、痛さ	아름다움(美しさ)、길이(長さ)、크기(大きさ)

(表 8)

形容詞	「さ」	「(음)ㅁ(um)」	「이(i)」	「기(ki)」
色彩形容詞	青さ	/	/	희기 (白さ)
味覚形容詞	甘さ	/	/	달기 (甘さ)
感情形容詞	悲しさ	슬픔 (悲しさ)	/	/
感覚形容詞	痛さ	아픔 (痛さ)	/	/

(表 9)

形容詞	「さ」	「(음)ㅁ(um)」	「이(i)」	「기(ki)」
客観性形容詞 (尺度形容詞)	長さ	/	길이 (長さ)	/
	広さ	/	넓이 (広さ)	/
	深さ	/	깊이 (深さ)	/
	高さ	/	높이 (高さ)	/
	大きさ	/	/	크기 (大きさ)
	強さ	/	/	세기 (強さ)

以上、「さ」に直接対応する「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」を見てみたが、その他にも、日韓翻訳本を通して見た結果、「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」に限られず、もっと多様な形態で用いられた。例えば、「-도 (度)」「-성 (性)」「-기 (氣)」「-점 (点)」などの漢語系接尾辞や「名詞句」「形容詞」「形式名詞」などの形態に現れている。

5. おわりに

以上、本論文では名詞化接尾辞「さ」をとりあげて、「さ」の意味用法を探ると共に、韓国語の名詞化接尾辞「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」との対照を通して両国語の接尾辞の特徴を検討してきた。

以上の考察の結果をまとめると、「さ」が付いて名詞化された場合、語基が本来持っている意味の中、一部分のみが表される。また、派生語として辞書に載っているのは、「形容詞+こと」と記述されていて、非常に曖昧さが見られる。で、色彩形容詞の場合「青いこと」と記述されているが、その場合、「青色」だけを表しているのか、でなければ、その以上の範囲まで表しているのか分かりにくい。そして、形容詞の分類を通しては、色彩を表す形容詞には基本的な意味だけ表しているのに対し、その他の形容詞には基本的な意味と派生的な意味両方表されている。数の比率としては、基本的な意味の例が圧倒的に多く見られる。両国語の接尾辞の対照を通して「さ」はほとんど全ての形容詞に付いて抽象名詞を作るのに対し、「(음)ㅁ(um)」「이(i)」「기(ki)」は動詞・形容詞に付いて具体名詞・抽象名詞を作る。そして、形容詞の種類によって接続が限れている。今後の課題として、本論文であまり触れなかった「さ」と韓国語における漢語系接尾辞「-도 (度)」「-성 (性)」「-기 (氣)」「-점 (点)」

との関連性と共に「句接辞」も視野に入れながら進めていきたい。

【注】

- (1) 宋 (1993) を参照されたい。金 (1994) では、音韻条件 (語幹が子音・母音) によって、「(음)〇 (um)」と「〇 (m)」に分けると述べている。
- (2) 本論文で用いている辞書は『日本国語大辞典』である。「形容詞」の意味と「さ」は派生名詞の意味、両方を載せているので参考にした。
- (3) 清水 (1978) の形容詞分類を参照されたい。
- (4) 西尾 (1972) では、形容詞の意味は「基本的な意味においては、ものの性質を表し、派生的な意味においては人の性質や、その他のより抽象的な属性を表すものが多いようである」と述べている。
- (5) 影山 (1993) を参照されたい。
- (6) 『日本語教育事典』の「形容詞」の項を参照されたい。
- (7) プラス・マイナス評価という用語は森田 (1989) を参照されたい。
- (8) 本論文では、語基が形容詞だけを対象にして「(음)〇 (um)」「이 (i)」「기 (ki)」の考察を行う。
- (9) 例としては、「長い」、「大きい」、「深い」、「広い」、「高い」などをあげられる。詳細については、宋 (1993) を参照されたい。
- (10) 宋 (1993) では、大きい程度を表す形容詞には、派生が適用されるが、小さい程度を表す形容詞には適用されないと述べている。
- (11) 宋 (1993) では、色彩形容詞を視覚形容詞にみなし、感覚形容詞と見ている。
- (12) 宋 (1993) を参照されたい。

【用例出典】

『弧高の人(上、下)』『新源氏物語(上)』『草の花』『一瞬の夏(上)』『さぶ』『風たちぬ・美しい村』『冬の旅』『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド(上)』『焼跡のイエス・処女懐胎』『人間失格』(新潮文庫 100 冊)、五木寛之 (1972) 『恋歌』(講談社)、夏目漱石 (1963) 『明暗(上)』(新潮社)、金賢姫 (池田菊敏訳) (1992) 『全女として(上)』(文芸春秋)、浅田次郎 (2000) 『鉄道員』(集英社)、三浦綾子 (1992) 『氷点(上)』(朝日文庫)

朝日新聞 (1989) 『天声人語』(原書房)、朝日新聞 (2000、6、11)

【参考文献】

(日本語文献)

- 相原林司 (1984)、「形容詞分類の一試案-派生形成可否による-」(『筑波大学文芸言語学』141)
- 遠藤織枝 (1985)、「接尾語「さ」の一考察」(『早稲田大学語学教育研究所紀要』31)
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』(ひつじ書房)
- (1999) 『形態論と意味』(くろしお出版)
- 島村礼子 (1995) 「単語の日英比較-心的辞書から見た派生語を中心に-」(『日本語学 14-5』(明治書院)
- 清水邦子 (1978) 「接尾語「み」と「さ」を中心に」(『早稲田大学語学教育研究所紀要』1LTNEWS64)

西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』『国立国語研究所報告 44』(秀夫出版)

(1995) 「名詞化接尾辞サについて」(『大妻女子大学紀要』27)

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』(角川書店)

日本語教育学会 (1982) 『日本語教育事典』(大修館書店)

日本大辞典刊行会 (1974) 『日本国語大辞典』(小学館)

(韓国語文献)

林洪彬(1974) 「名詞化의 意味特性에 대하여」 『国語学 2』(国語学会)

蔡琬(1979) 「名詞化素 ‘-기’」 『国語学 8』(国語学会)

HA CHI GUN(1987) 『国語派生形態論』(南明文化社)

(1996) 「国語이름씨 派生接辞 ‘-이’ ‘-음’ ‘-기’ 特性研究」 『言語와 言語教育 第 1
1 輯』(東亜大学校語学研究所)

宋喆儀(1993) 『国語의 派生語形成研究』国語学叢書 18 (太学社)

金석득(1994) 『国語形態論』(塔出版社)

金倉섭(1996) 『国語의 單語形成과 單語構造研究』国語学叢書 21 (太学社)

ハングル学会(1994) 『国語大辞典 (第3版)』(語文閣)